（別紙様式３）

令和 4 年 3 月 31 日

研究開発完了報告書

文部科学省初等中等教育局長　殿

住所　奈良市法蓮町 1000 番地
管理機関名　学校法人奈良育英学園
代表者名　理事長　藤井 宜夫

2021 年度地域との協働による高等学校教育改革推進事業に係る研究開発完了報告書を，下記により提出します。

記

１　事業の実施期間

令和 3 年 4 月 1 日（契約締結日）～　令和 4 年 3 月 31 日

２　指定校名・類型

学校名　育英西中学校・高等学校
学校長名　北谷 成人
類型　グローカル型

３　研究開発名

「他者を巻き込む行動」により地域に貢献する「自立女子」の育成

４　研究開発概要

進路目標の異なる 3 コースをもつ推進校では、2020 年度大学入試改革に先駆けて、一部教科においては課題解決型の学びを全コースで導入した。また探究的な学びを目的とした学校設定科目を設置してきた。これらの先行的な取り組みを実施する中で、どのコースにも共通する課題があると認識している。それは課題解決に際し、解決策提案にとどまりがちな点である。将来地域人材として地域課題の解決に資する女性の育成にあたっては、この現状を打開し、「行動する力」とりわけ「他者を巻き込む行動ができる力」を培う必要がある。そこで推進校は 3 コースの特性を生かし、下記の研究開発を行う。

1　特設コースⅠ類を対象とした学校設定科目「シナジータイム」、立命館コースを対象とした学校設定科目「Science＆Discovery」(S.D.)を体系化する。
2　特設コースⅡ類を対象とした奈良県立大学との共同プロジェクトを軸にして、推進校中学校で導入した国際バカロレアにおける、「概念」を中心に学ぶという考え方に依拠して授業開発をする。教科内容ありきではなく、概念ありきの学びを構築し、教科学習の中で思考力・探究力を培う。
3　地域・世界とのつながりを生かして実現する行動実践が、生徒に与える影響を検証する。

4　生徒に自らの力のメタ認知を促すための評価法を開発する。

これらの研究開発の素地として、「知識・技能の獲得」「内的動機付け」「実践」という各過程をスパイラル式に経験し、その過程を生徒自身がメタ認知することで、「他者を巻き込む行動ができる力」は得られると仮説を立てる。

5　学校設定教科・科目の開設，教育課程の特例の活用の有無

・学校設定教科・科目　開設している　・　開設していない

・教育課程の特例の活用　活用している　・　活用していない

6　運営指導委員会の体制

氏名	所属・職	備考
沼田 守弘	奈良育英高等学校(協力校)・校長	学校教育に専門的知識を有する者
東 誠司	奈良育英小学校・校長	学校教育に専門的知識を有する者
田尻 忠邦	特別非営利活動法人 関西NGO協議会・理事	学識経験者
福井 重忠	社会福祉法人 奈良市福祉協議会・会長	学識経験者
松岡 慧祐	奈良県立大学 地域創造学部・准教授	学識経験者
村井 猛	有限会社 村井食品・社長	学識経験者
桜井 政成	立命館大学 政策科学部・教授	学識経験者
内田 忠賢	国立大学法人 奈良女子大学・教授	学識経験者
佐々木 南実	都留文科大学 国際教育学科・講師	学識経験者
大塚 耕司	大阪府立大学・副学長	学識経験者

7　高等学校と地域との協働によるコンソーシアムの体制

機関名	機関の代表者	
学校法人 奈良育英学園(管理機関)	理事長	藤井 宣夫
学校法人 奈良育英学園(管理機関)	事務局長	竹田 基宏
育英西高等学校(推進校)	校長	北谷 成人
奈良育英高等学校(協力校)	校長	沼田 守弘
奈良育英小学校	校長	東 誠司
育西会 ＊事業推進校PTA組織	会長	引原 康充
特別非営利活動法人 関西NGO協議会	代表理事	三輪 敦子
社会福祉法人 奈良市福祉協議会	会長	福井 重忠
公立大学法人 奈良県立大学	学長	浅田 尚紀
有限会社 村井食品	社長	村井 猛
学校法人立命館 立命館大学	学長	仲谷 善雄
国立大学法人 奈良女子大学 大和・紀伊半島学研究所	所長	保 智己
公立大学法人 都留文科大学	学長	藤田 英典
公立大学法人 大阪府立大学	学長	辰巳砂 昌弘

8　カリキュラム開発専門家，海外交流アドバイザー，地域協働学習支援員

分類	氏名	所属・職	雇用形態
カリキュラム開発専門家	中山 芳一	国立大学法人　岡山大学・准教授	非常勤職員
海外交流アドバイザー	玉井 満代	(株)タマイインベストメントエデュケーションズ・社長	非常勤職員
海外交流アドバイザー	田中 真美子	HOME STAY AUSTRALASAI プロジェクトマネージャー	非常勤職員
海外交流アドバイザー	北田 多喜	翻訳家	非常勤職員
地域協働学習実施支援員	久保 佳苗	育英西中学校・高等学校　事務嘱託	派遣

9　管理機関の取組・支援実績

（1）実施日程

業務項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
コンソーシアム関連	26	14 25	24	25 27				17	9 19 24	23 31	25	21 22
運営指導委員関連		14 25	4					17		31	25	22
海外交流アドバイザー										31		
地域協働学習実施支援員	←											→

（2）実績の説明

活動日程	活動内容
令和３年　5/14	立命館大学桜井先生と奈良女子大学保先生による文系と理系の研究についての特別講義。内容は「研究テーマのつくり方」。
令和３年　5/25	第１回会合：今年度の実施計画について説明し、今年度の方針について指導助言を受ける。
令和３年　4/26、6/24、7/25、12/19、12/24 令和４年　1/23、3/21	奈良市社会福祉協議会・奈良市フードバンクセンターと生徒とのミーティングを数回実施。主に今後の活動方針や活動内容について議論した。 ・4 月 26 日：奈良市社会福祉協議会と打ち合わせ。 ・6 月 24 日：校内におけるフードドライブ実施。奈良市フードバンクセンターが品物を仕分

	け。 ・7 月 25 日：フードパントリーに参加。奈良市社会福祉協議会と打ち合わせ。 ・12 月 19 日：フードパントリーに参加。奈良市社会福祉協議会と打ち合わせ。 ・12 月 24 日：奈良市フードバンクセンターと生徒との合同ミーティング。 ・1 月 23 日：奈良市フードバンクセンターの創立 1 周年記念に際して、ボランティアの実施側という立場で、活動報告などパネリストとして参加する予定だったが、新型コロナウイルス感染拡大に伴い、中止になった。この時、発表予定だった内容は、奈良市フードバンクセンターによって冊子としてまとめられ、配布される予定である。 ・3 月 21 日：初めて富雄でフードパントリーが実施される事になり、参加した。
令和 3 年　6/4、6/17～10/14（毎週木曜日・夏休みは除く）、7/27 令和 4 年　1/25	都留文科大学との共同プログラムにおいて、佐々木先生と連携を図り、谷萩先生の特別講義を受講し、和歌山コンペティションに向けた指導助言を受けた。1 学期半ば以降、コンペティション応募に向けて、毎週大学生と zoom による面談を実施し、内容のブラッシュアップを図った。 ・6 月 4 日：都留文科大学佐々木先生と zoom で打ち合わせ。 ・6 月 17 日～10 月 14 日：毎週木曜日に都留文科大学の学生と zoom で相談を重ね、発表準備を行う。 ・7 月 27 日：都留文科大学谷萩先生によるオンライン講義を実施した。 ・1 月 25 日：生駒山上遊園地と来場者数増加を目指した企画の打ち合わせを zoom で行う。
村井食堂との打ち合わせは実施できず。	村井食堂との「お弁当総選挙」における取組 ・今年度の取組と流れについて説明 ・校内発表プレゼンの内容説明等 ・校内発表・商品開発に向けて生徒との打ち合せ ・商品化の企画会議
令和 3 年　11/17	今年度の成果報告として実践発表会を開催。高校 1・2 年生の発表や授業見学後、研究協議会を実施。 第 2 回会合：今年度の報告と来年度の方針について協

	議し、助言を受ける。
令和３年　12/9	大阪府立大学への訪問。 ・高校１・２年特設コースⅡ類の生徒が参加。
令和４年　1/31	高校３年立命館コースの「S.D.論文」最終発表会において、立命館大学の教授陣からオンラインでの指導助言を受ける。
令和４年　1/31	海外アドバイザーの北田氏のサポートを得て、協定校のディニアプトリ女子校とのオンライン交流が実現。
令和４年　2/15	SDGs コンテスト：高校１年生が SDGs に関する探究活動の発表を実施し、外部審査員として運営指導委員に参加いただく予定だったが、新型コロナウイルスの感染状況拡大をふまえ、中止となった。
令和４年　2/25	高校２年立命館コースの「S.D.探究」中間発表会において、立命館大学の教授陣からオンラインでの指導助言を受ける。
令和４年　3/22	第３回会合：３年間のグローカル事業について、最終報告を行い、来年度の取り組みに関する助言を受ける。

１０　研究開発の実績

（１）実施日程

業務項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
「シナジータイム」成果発表				○				○				○
「S.D.」成果発表								○		○	○	
近隣大学連携成果発表				○	○		○	○		○		
「家庭基礎」弁当商品開発									○			
海外との学校交流								○		○	○	
輝く女性の講演会で内的動機付けを向上			○				○				○	
評価法の開発（会議のみ表には記載）	○		○	○		○	○	○	○	○		○

普及活動				○	○		○	○	○	○	○	○

（２）実績の説明

①研究開発の内容や地域課題研究の内容について

研究開発実施計画に記載した通り、推進校は、学校設定科目「シナジータイム」（特設コースⅠ類）、「Science&Discovery」（立命館コース）の実践と、特設コースⅡ類を中心とした教科での探究的な学びの実践を通じて、生徒が「知識・技能を獲得」するのみにとどまらず、自ら課題を発見し課題解決のために、他者と協働しながら主体的に取り組む姿勢を身につけること、それを教員側がどのように評価、体系化するのかに重点を置いた。

（ｉ）「シナジータイム」（特設コースⅠ類）

今年度は、3 学年のシナジータイム担当者による会議を週に１回実施し、高校 3 年間における内容のつながり、スキルの育成を意識して、カリキュラム開発・シラバスの作成に注力した。

【1 年】

・1 学期は授業開きを兼ねて、「シナジータイムとは何か？」をテーマに、学びに向かうための方法（ATL スキル・学問的誠実性）を知り、新たな人間関係の構築を図った。また、自分自身の過去を振り返る事で、過去から現在にどう影響を及ぼしているのかをテーマに、グループで話し合い、コミュニケーションスキルや協働スキルを養った。

・夏休み課題として、「SDGs の視点を取り入れてタイについて調べる」をテーマに個人レポートを作成し、SDGs について知るきっかけ作りと、2 学期の学習準備を行った。

・夏期講習中に、高校 2 年生と合同で授業を実施し、タイに関するテーマの引継ぎ会を実施した。

・2 学期は、夏休み課題「SDGs の視点を取り入れてタイについて調べる」と高校 2 年生から引き継いだテーマの結びつきを探し、問いを立て、その内容について発表した。

・11 月 9 日、「EU がやってくる」という企画で、ドイツ連邦共和国大使館一等書記官 DanTIDTEN 氏にお越しいただき、EU の成り立ちや現在のヨーロッパ情勢に関する講演会を実施した。

・11 月 30 日、公益財団法人 PHD 協会から、神戸で中心的に活動されているミャンマー出身のソーユモン氏にお越しいただき、ミャンマーの現状に関する講演会を実施した。

・1 月 25 日、今年度も「タイ課題解決型ツアー」の実施がかなわなかったので、現地で暮らしている方々やタイにある日系企業でお仕事をされている方々に、探究内容の発表を聞いていただいた上で、意見交換する機会をもった。

協力企業など：APEX タイツアーマネージャー片山登志雄氏
元バンコク日本人商工会議所事務局長高木正雄氏
フルハーフ・マハジャック社小島氏

・2 月 8 日、JTB サンフランシスコ支店長の佐藤氏からシリコンバレーでの仕事に関する講演会を実施した。

・探究の成果は、2 月下旬に実施予定だった本校独自コンテスト「SDGs コンテスト」で発表する予定だったが、本校における新型コロナウイルスの感染状況を考慮し中止となったため、3 学期の授業内で発表会を行った。

・3 月 5 日、朝日新聞社主催「生徒のための SDGs 実践報告会」に 1 グループが参加し、タイについての探究内容を発表した。この参加は運営指導委員の田尻氏の紹介によって実現したものである。

【2 年】

・１学期は、前年度におけるタイに関する探究活動を継続し、それぞれの課題について、実際に自らで行動できる事は何かをテーマに取り組んだ。各グループが外部団体（テーマに関連する研究をしている様々な大学の先生方、タイで活動されている各種団体など）とアポイントメントを取り、質問や意見交換を行った。
・夏期講習中に、高校 1 年生と合同で授業を実施し、タイに関するテーマの引継ぎ会を実施した。
・2 学期は、今までの活動を振り返る事で、必要な力（スキル）の自己分析を試みた。
・10 月末に実施した研修旅行の事前・事後指導として、JTB の吉住氏に授業協力を仰ぎ、旅行の行き先である長崎・福岡と奈良について、ビッグデータを用いて、観光の視点から比較・分析する活動に取り組んだ。活動の成果として、各地域の強みを生かした観光ポスターを制作した。
・11 月 17 日、グローカル研究成果発表会では、2 年間取り組んできた活動内容をスキル別で分類し、今後の学校生活や進路探究にどのように活かしていくかを発表した。
・3 学期は、数か月後に迫った進路実現を見据えて、自身にとって今後必要となるスキルの明確化に取り組んだ。さらに、より幅広く進路を考える事ができるように、本校の卒業生でカラーコーディネーターの林氏を招き、自己を知り、多角的に物事を捉える事の大切さについて講義を受けた。
・校内で有志による文房具回収を行い、NPO 法人ワールドギフトへの支援活動につなげた。

【3 年】

・1 学期は、これまでの活動内容の整理と過去の探究活動から自らの考えを深め、希望進学先（専門学校・短期大学・大学）のアドミッションポリシーと照らし合わせながら、志望理由の作成に取り組んだ。
・2 学期は、「自分のなりたい姿」について、高校 3 年間の取り組みを通して描いた高校卒業後の進路、将来の夢や就きたい職業などについてまとめ、発表した。
・10 月 16 日、現役キャビンアテンダントの北谷奈菜氏による「変わりゆく時代の中での自分らしさ・自分の強み」についての講演会を実施した。
・11 月 17 日、グローカル研究成果発表会では、３年間の振り返りと後輩たちに想いを繋ぐ事をテーマに発表を実施した。

（ⅱ）「Science&Discovery」（立命館コース）

「Science&Discovery」（以下「S.D.」と呼ぶ）は、立命館コース開設時から取り組んでいる推進校の学校設定科目である。高校 1 年生で探究手法を学び、高校 2・3 年の 2 年間で、探究活動を完成させる。生活に根ざした身近な疑問をもつことを出発点に、生徒自身が文理を問わずに研究テーマを設定する事を目標とする。今年度は、3 学年の S.D.担当者による会議を週 1～2 回実施し、高校 3 年間における内容のつながりを意識して、意見交換を重ねながらカリキュラム開発・シラバスの作成に尽力した。

【「S.D.基礎」（1年）】

・1学期は、調査手法や研究計画の立案について、基礎的な知識を身に付けることを中心に授業を展開した。具体的には、各クラスの担任についてインタビューや観察を通して分析するという「担任解体新書」を作成した。その後、人文社会科学分野・自然科学分野担当の教員が研究手法の基礎的な内容の講義を実施した。人文社会科学分野ではアンケート調査による仮説の重要性、インタビュー調査における調査対象者の選定など、自然科学分野では、調査計画書の作成について講義した。

・夏休み課題として、人文社会科学分野からは４つのキーワード（ジェンダー・グローバル化・サスティナビリティ・ダイバーシティ）から１つを取り上げて調査する課題、自然科学分野からは 1 学期に提示した実験の中から 1 つを選択し、その実験にまつわる先行研究や新聞記事などを調べるという課題を提示した。

・2学期は、人文社会科学分野・自然科学分野の各担当者がクラスの半数ずつを担当し、各分野の研究方法の詳細について講義・作業（グループワークや実験）という流れで実施した。人文社会科学分野ではジェンダー論から社会の構造を理解する学習、自然科学分野では、全ての班が研究計画書に基づく基礎実験を行った。

・探究の成果は、2月下旬に実施予定だった本校独自コンテスト「SDGsコンテスト」で発表する予定だったが、本校における新型コロナウイルスの感染状況を考慮し中止となったため、3学期の授業内で発表会を行った。

【「S.D.探究」（2年）】

・1学期は、「探究の目的・探究の進め方・テーマ決定までの過程」を講義した。

・5月に立命館大学政策科学部桜井教授と国立大学法人奈良女子大学大和・紀伊半島学研究所保所長による、文系と理系における「研究テーマのつくり方」について特別講義を実施した。

・6月末に、人文社会科学分野・自然科学分野のどちらに所属するかを決定した。

・面談を通して、夏休みの課題からは文系・理系ごとに分かれて探究活動を開始した。今年度は人文社会科学分野には27名、自然科学分野には47名が所属している。

・2学期は、引き続き、分野ごとに分かれて実施した。人文社会科学分野は、個人探究、自然科学分野は、グループ探究で実施している。それぞれ、研究テーマの確立・具体化、研究計画書の構想を中心に行った。分野ごとに数回の報告会を重ねた。

・3学期は、2月 25 日に実施された「中間発表会」に向けて、探究活動を継続しつつ、今年度の成果について整理した。

【「S.D.論文」（3年）】

・1学期は、人文社会科学分野では前年度の探究内容の継続と論文の書き方の基本を習得した。自然科学分野では、前年度から繰り越した課題に対する追加実験に継続して取り組んだ。

・2学期は、人文社会科学分野では論文執筆を中心に行い、11月には論文完成前の発表会を実施した。自然科学分野では、実験結果の整理とレポートの作成に取り組んだ。各分野とも、担当者が各生徒・各グループと適宜面談を行い、進捗状況の把握に努めた。

・1月 31 日に「最終発表会」を実施し、各分野から評価の高かった個人・グループについて、それぞれ３つずつの発表を選出した。

（ⅲ）近隣大学との共同プロジェクト（特設コースⅡ類）

今年度は、進路指導部長と各学年の担任による特設コースⅡ類会議を週１回実施し、意見交換を重ねながら、体系的なカリキュラム開発を行った。

【1年】 シナジータイムでの取り組み

・本事業 1～2 年目にかけて、奈良県立大学地域創造学部松岡准教授にご指導頂いた探究の手法を元にしながら、今年度は研究活動のプロセスをより多く体験する事をテーマに本校教員によるプログラムを実施した。本事業が終了する次年度以降、本校教員による自走した取り組みの実施が目標である。

・1 学期はボードゲームプロジェクトから研究テーマと問いの設定、仮説の立案などの手法を学んだ。仮説を検証するための実験を行う中で、特定の変数のみを変化させる事で、理論の確認を行うという方法を学ぶために、物理基礎で取り扱う「浮力の性質」を考察する実験手法を利用した。

・２学期は興味の方向性が同じ者同士でグループを組み、自由なテーマ設定で探究活動を行い、11 月 17 日、グローカル研究成果発表会で、その成果をポスターセッション形式で発表した。

・3 学期には、全てのグループが研究レポートを執筆した。データ分析の方法やそれを考察する思考力、仮説を立案する力を身に付けた上で、社会問題（少子化と人口問題）をテーマに調査と考察を行った。

・12 月 9 日に大阪府立大学の女性研究者組織「ＩRIS」を訪問し、大学における研究について、本物に触れ、学ぶことができた。

・1 月 29 日に実施された「Glocal High School Meetings2022」の日本語発表部門に 1 チームが参加した。

・3 月下旬には、第 6 回 IBL ユースカンファレンスに参加し、今年度の探究活動に関する相互評価、フィードバックを受ける予定である。

【2年】 都留文科大学との共同プログラム

・1 学期は、「アフターコロナのまちづくり」をテーマに奈良県内の解決すべき課題を探し、共通点があるテーマごとにグループ分けを行い、先行研究や事例を調査した。

・6 月には、探究活動の成果発表会を実施した。都留文科大学の佐々木先生にオンラインで参加していただき、「FOCUS 第 4 回全国高校生 SR サミット」に出場するグループを選定し、助言を受けた。

・7 月、都留文科大学の谷萩先生による講義や大学生の研究発表をオンライン聴講し、研究方法やスライド作成のポイントなどを詳しく学んだ。

・7 月 31 日～8 月 1 日、「FOCUS 第 4 回全国高校生 SR サミット」に世界に吉野本葛を広める事をテーマに探究活動を行っている 1 グループが参加した。

・2 学期は、週に１度、オンラインで都留文科大学の学生から研究へのアドバイスを受けながら、各グループが考えた課題や問いに対する解決策について考察を深めた。その際、関係企業への協力依頼、調理実習、実験など、課題解決のための行動計画を立て実践に移した。

・10 月に、これまでの探究成果について、行政課題に対するデータを利活用した解決アイデアを競う「第 5 回和歌山県データ利活用コンペティション」に応募する。

・11 月、探究内容の英語版データを作成し、クラス内でオーディションを実施し、

「Glocal High School Meetings2022」の英語発表部門に出場する代表１チームを決定した。

・3 学期は、探究成果をもとに、実際に自分たちができる行動とは何かを具体的に考え、実践した。生駒山上遊園地の活性化をテーマにしたグループは、遊園地の職員の方とオンライン会議を実施し、共同して SNS を利用した宣伝協力をする事が決定した。

・3 月下旬には、第 6 回 IBL ユースカンファレンスに参加し、今年度の探究活動に関する相互評価、フィードバックを受ける予定である。

【3年】 シナジータイムでの取り組み

・毎学期、ゲストスピーカーを招聘した。スピーカーには本校教員に加え、運営指導委員の奈良女子大学内田教授にもお越しいただいた。大学進学にあたっての準備、大学側がどのような学生を求めているのかなどについて話を聞き、個人でのリフレクションを実施した。

（ⅳ）ディニアプトリ女子校とのオンライン交流

1 月 31 日に、ディニアプトリ女子校とのオンライン交流を、高校１年から希望者を募り実施した。各校の学校紹介プレゼンテーションを実施後、参加者 11 名を 5 グループに分け、日本・インドネシアで人気のアニメや料理等に関して交流する時間をもった。

（ｖ）English Plus Department の取り組み

・ネイティブスピーカー2 人がティームティーチングで、中学 3 年から高校 3 年まで、各クラス毎週 1 時間授業を実践している。授業内容は、グループディスカッション、個人プレゼンテーション、インタビューテストが中心である。ルーブリックに基づき、各取り組みの評価を行っている。

・高校１年生では、各学期において「日常生活で面白いと思った話題・日々の中で変えたいと思っている事」「困難な状況下において、どのように自己と他者で考えが違うのか」「十代の人々が抱える学校生活における共通の問題、また、それに対して、どのようにアドバイスをするのか」を討論のテーマとして取り扱った。

・高校 2 年生では、各学期において「日本の中で訪れた事のある場所を比較し、そこで得た経験について」「私がしたい事・したくない事」を討論のテーマとして取り扱った。

・高校 3 年生では、「日本における祭日、行事などのお祝いについて」「個人の習慣や日本の風習に基づくカルチャーショック」を討論のテーマとして取り扱った。

（ⅵ）スウェーデン・リンショーピン大学からのインターシップ生との交流

計画では、6 月に 3 週間、本校生徒宅にホームステイする形で、インターンシップ生を受け入れる予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大のため、ZOOM を活用してのオンライン交流に変更した。インターンシップ生には、English Plus Department の時間に参加してもらい、「感情と共感」（高校１・2 年）、「文化行事と祭日」（高校 3 年）をテーマに討論、発表をおこなった。

（ⅶ）「ATL スキル」に基づく評価法の日常的な活用

探究系科目において、成果発表等のリフレクションに「ATL スキル」に基づく評価法を活用し、自己評価・他者評価を行なった。その上で、「ATL スキル」に関する生徒実態アンケートを 7 月と 2 月の年 2 回実施し、どのようなスキルが伸びているかを検証した。

（viii）教科での探究的な学びの構築と評価法の開発について

本校中学校で導入している国際バカロレアにおける「概念」を中心に学ぶ考え方に依拠し、探究的な学びの構築を実践した。今年度は教務部長が中心となって、高校 1 年生の教科担当者で構成された授業・評価担当者会議での話し合いを元に、授業内容だけでなく、各教科で評価課題と評価法について検討した。その実践事例は、11 月 17 日に開催された「グローカル事業研究成果発表会」の研究授業での発表にもつながった。当初は特設コースⅡ類の取り組みとして位置づけられていたが、今年度は高校 1 年生全コースに裾野を広げて、探究的な学びの構築に取り組んできた。来年度からの評価法について、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体的に学びに向かう力」の 3 観点に基づき、各教科独自のルーブリックを作成し、評価に用いていく予定である。

（ix）輝く女性の講演会

・毎学期に 1 回、社会の様々な分野で活躍されている女性をお招きし、講演会を実施している。将来に向けて、大学進学や就職だけでなく、グローバルな視点を取り入れながら、生徒 1 人 1 人がこれからの生き方や人生設計について考える契機となるようなテーマ設定を行っている。

・6 月 11 日、京都女子大学の竹安栄子学長を講師としてお招きし、「男女の格差、何が問題か：世界との比較で考える　日本の現状と課題」をテーマに講演会を実施した。

・10 月 28 日、大阪府立大学の真嶋由貴恵教授を講師としてお招きし、「なぜ今ここにいるのか？－看護から工学、異分野融合でめざすイノベーション－」をテーマに講演会を実施した。

・2 月 22 日、阪急うめだ本店にある Love＆Sense 店長（株式会社福市）の岩夏実氏を講師としてお招きし、「すきなことを仕事に－世界平和×ファッション－」をテーマに講演会を実施した。

②地域との協働による探究的な学びを実現する学習内容の教育課程内における位置付け（各教科・科目や総合的な学習（探究）の時間，学校設定教科・科目等）

（ア）高校 1 年生　：シナジータイム（全コース）
S.D.基礎（立命館コース）
その他、全ての教科で探究的な学びに基づく評価課題を実施。

（イ）高校 2 年生　：シナジータイム（全コース）
S.D.探究（立命館コース）
コミュニケーション英語Ⅱ（英語を使用した発表への作文指導）

（ウ）高校 3 年生　：シナジータイム（全コース）
S.D.論文（立命館コース）

③地域との協働による探究的な学びを取り入れた各科目における学習を相互に関連させ，教科等横断的な学習とする取組について

各教科の授業で、本事業の探究活動に資する内容を扱う。各学年において、シナジータイムで身に付けたスキルを活かし、各教科の内容に落とし込む事を目指した。高校 1 年生では、教科担当者会議時に情報交換の機会を増やし、教科の枠組みをこえた指導内容の共有・精査に取り組んだ。高校 2 年生では、英語を使用した発表に向けての作文指導、効果的なスピーチについて指導を行った。

④類型毎の趣旨に応じた取組について

・高校 1 年生の「シナジータイム」、高校 2 年生の「シナジータイム」において、高校生の視点で、奈良県が抱える課題を取り上げ、解決策を提案する探究活動を実施した。地元企業や各種団体と相談する機会が増え、今後も関係性を維持していく予定である。
・有志からなる「ボランティア実行委員会」が、奈良市福祉協議会が行っている「フードパントリー」に 3 日間参加した。また、今年度は校内でフードドライブを 1 回実施した。
・地域に関する探究活動に、インドネシアのディニアプトリ女子校、スウェーデン・リンショーピン大学の学生とのオンライン交流、タイや北米など、現地で生活されている方々とのオンライン交流が加わることで、グローバルな視点を養う事ができる機会としている。
・ネイティブ教員との授業「English Plus Department」を活用し、語学力のさらなる向上を目指している。
・SDGs コンテストは、2 月 15 日に、高校 1 年特設コースⅡ類の生徒たちによる運営の下、高校 1 年特設コースⅠ類（シナジータイムの取り組み）、高校 1 年立命館コース（S.D.基礎の取り組み）が参加し、外部審査員として、推進校のコンソーシアムメンバー・運営指導委員の方々に来校していただく予定だったが、本校の新型コロナウイルス感染状況を鑑み、今年度は中止となった。

⑤成果の普及方法・実績について

取り組み内容	成果の普及・実績
シナジータイム	・日経ウーマノミクスプロジェクト「Are you ready?SDGs が拓く未来」(7/13) ・第 2 回 SB Student Ambassador ブロック大会　西日本大会(11/7) ・水都サスティナブルツアー(12/19) ・Thai online 交流会（奈良新聞掲載） バンコク元商工会議所所長・現地企業との交流(1/25) ・北米オンライン研修(2/8) ・生徒のための SDGs 実践報告会(3/5)
近隣大学との共同プログラム	・第 4 回全国高校生 SR サミット FOCUS(7/31～8/1) ・第 5 回和歌山県データ利活用コンペティション（10/22） ・Glocal High School Meetings 2022　日本語発表部門・英語発表部門に参加(1/29) ・第 6 回 IBL ユースカンファレンス(3/19～3/26)

S.D.基礎　S.D.探究 S.D.論文	・「S.D.論文」最終発表会校内実施（オンライン）(1/31) ・SDGs 探究 AWARDS（一般社団法人 未来教育推進機構（UMEDAI））への応募(2/1) ・「S.D.探究」中間発表会校内実施（オンライン）(2/25)
お弁当総選挙	インターネット投票で選ばれた代表 4 チームの弁当を村井食品の協力を得て、商品化する

⑥研究開発の実施体制について

ⅰ地域との協働による探究的な学びを実現するためのカリキュラム・マネジメントの推進体制

今年度はグローカル推進委員のメンバーが、進路指導部に所属し、週に 1 回の部会で議題を報告し、運営委員会、教科主任会議、各学年団と連携して事業を進めた。定期的に各事業の担当者ごとに会議を開催し、詳細な計画・運営についての決定、各事業の進捗状況の確認等を実施し、円滑な事業遂行を目指した。

ⅱ学校全体の研究開発体制について（教師の役割、それを支援する体制について）

・進路指導部会を週に 1 度開催し、各事業の計画・運営の方針を決め、各校務分掌、各学年との連携を図った。

・生徒の探究活動の成果普及に関しては、進路指導部が教務部内の ICT 委員会、シナジータイム・S.D.担当者と連携して実施した。

ⅲ学校長の下で，研究開発の進捗管理を行い，定期的な確認や成果の検証・評価等を通じ，計画・方法を改善していく仕組みについて

進路指導部が中心となり、研究開発を進めている。年間 2 回、生徒アンケートを実施し、集計結果の分析を行うと共に、評価ツール「GPS-Academic」の受検の機会を 1 月に設け、探究活動の成果を可視化し、身についたスキルを踏まえた上で、次年度の取り組みに活かしていく。

ⅳカリキュラム開発に対するコンソーシアムにおける取組について

コンソーシアム	取り組み内容
社会福祉法人 奈良市福祉協議会	ボランティア実行委員会への活動支援・指導 S.D.探究におけるインタビュー協力
公立大学法人　都留文科大学	高校 2 年特設コースⅡ類の共同プログラムにおける指導助言
国立大学法人　奈良女子大学	高校 2 年立命館コース「S.D.探究」特別講義 高校 3 年特設コースⅡ類のシナジータイムにおける指導助言
公立大学法人大阪　大阪府立大学	高校 1・2 年生特設コースⅡ類参加の講演会の実施、大学見学会の受け入れ
有限会社　村井食品	「お弁当総選挙」を経ての共同商品開発

学校法人立命館　立命館大学	高校２年立命館コース「S.D.探究」特別講義、中間発表会における指導助言 高校３年立命館コース「S.D.論文」最終発表会における指導助言

１１　目標の進捗状況，成果，評価

今年度も、本事業の研究開発のテーマである「他者を巻き込んで行動する力」の実践として、シナジータイム（高校１・２年）、近隣大学との共同プログラム（高校２年）における課題解決の方策を立て、行動に移す事ができたのは１つの成果である。新型コロナウイルスの影響から、当初の予定とは異なる取り組みも多々あったが、たとえ現地に行く事が出来なくても、タイとのオンライン交流や国内研修旅行時の英語学習プログラムなど、国内におけるグローバルな活動から視野を広げ、それを地域社会が抱える課題の解決策にどのように活かす事ができるのかを考察し、実際の行動に繋げる事ができた。

本事業に取り組んだ３年間で、本校におけるコースごとのコンセプトの明確化が図られた。特設コースⅠ類では、「タイ課題解決型ツアー」に向けて、先輩から引き継いだテーマを元に探究活動を進めるが、現地に行けない中で、タイの課題だけでなく、身の回りから世界へつながる社会貢献について関心を広げ、積極的に様々な活動に参加するようになった。特設コースⅡ類では、各科目の内容で培った探究するスキルを地域課題に落とし込んで、解決策を提案するという流れを構築する事ができた。立命館コースでは、３年間における S.D.の取り組みから、学年間におけるタテのつながり、また高校と大学におけるタテのつながりの可視化につながった。また、シナジータイム・S.D.においては、今年度は教科担当者会議を定期的に開く事で、学年同士のカリキュラムのつながりを意識し、体系的なシラバスの作成に取り組む事ができた。

昨年度からカリキュラムに組み込んだ「English Plus Department」の成果について、今年度の高校２年生のスコア（高校１年時の１月実施分と高校２年時の６月実施分の比較）を見ると、どのコースにおいても大きくスコアを伸ばしている事が分かった。通常１年間において、50 ポイントの上昇が見られれば平均的であると言われている中、約半年で 90～115 ポイント伸ばす事ができ、English Plus Department の取り組みが GTEC のトータルスコアに大きく影響を及ぼしている事が分かった。

探究的な学びの実践は、特設コースⅡ類だけでなく、高校１年生の全教科で体系的に実施することができた。来年度からの新カリキュラムの実施に伴い、今年度において本校モデルとして完成させた、各教科における評価規準（ルーブリック）を用いた評価法を実践する事が目指される。また、国際バカロレアの「ATL スキル」の手法に学んだ本校独自の評価規準（ルーブリック）は、実施した探究活動におけるリフレクションの際に用いられるようになった。

生徒アンケートによると、批判的思考力・情報スキルの上昇を実感しているようである。しかし、GPS-Academic を用いたデータで身に付いたスキルを客観的に数値化すると、協働的思考力の高まりが顕著で、批判的思考力や創造的思考力はまだまだ低いレベルである事が判明した。次年度以降も、探究系科目や各教科におけるスキル育成を意識させた取り組みが必要である。

＜添付資料＞目標設定シート

１２　次年度以降の課題及び改善点

・探究活動における計画→行動→評価→検証のサイクルについて、１サイクル辺りにかける時間を短く設定し、振り返りを行う機会を増やすようにする。
・本校の評価法について、来年度からの新カリキュラム実施に伴い、その実践を通してさらなるブラッシュアップを図る。
・探究的な学びにおける活動実績を生かした大学進学への進路探究を深める。そのために、国公立大学や私立大学の総合型選抜入試の受験者数を増やす。
・本事業終了後も、グローカルメンバー・運営指導委員など、本事業において構築した関係性を維持・継続する。

【担当者】

担当課	育英西中学校・高等学校	ＴＥＬ	0742-47-0688
氏　名	山本 麻鈴	ＦＡＸ	0742-47-2689
職　名	教諭（グローカル推進委員長）	e-mail	m-yamauchi@ikuei.ed.jp